

『米山新田(よねやましんでん)と米山用水(堰溝、ゆみぞ)』

米山用水は、三重県伊勢市横輪町(よこわちょう)の横輪川の米山用水頭首工(とうしゅこう、写真②、河川から用水の取り入れ口、おせん淵の少し下流)から上野町を通って、円座町(えんざちょう)まで続いています。全長約7.6kmあります。円座町の人々は米山用水を『堰溝(ゆみぞ)』と呼んでいますが、ここでは米山宗隆(むねたか)さんと米山宗持(むねもち)さんの功績に敬意を表して、米山用水と記載します。

1 米山新田と米山用水

(1) 昔、沼木村(ぬまきむら)円座(現在の三重県伊勢市円座町)は少し高台にあるため、宮川が村のすぐとなりに流れているにもかかわらず、水利が悪く、ほとんど荒れ地になっていました。そのため、米の収穫量は少なく、村の人々は麦やあわ(参考①)を食べて、苦しい生活をしていました。

(2) 江戸時代の元禄2年(1689年)に、紀州藩(きしゅうはん)円座組の大庄屋(おおじょうや、参考②)であった米山家4代の米山宗隆(むねたか、参考③)さんを中心に、村の人々と力を合わせ、新田(しんでん、参考④)をひらき、約5.5kmの水路(参考⑤)の工事を始め、7年後の元禄9年(1696年)に工事は完成しました。水は上野町にある大熊山(おぐま(やま)、参考⑥)の谷川から引きました。機械の無い当時は、鍬(くわ)でみぞを掘り、高い所はけずり、「もっこ」(参考⑦)で土を運び、低い所を埋め立てる重労働の仕事でした。これにより県道伊勢南島線(なんとうせん)沿いの約7ha(ヘクタール)(参考⑧)の良い田を得ました。水路の水のおかげで、新田には、稻が実り、畑には、茶やこうぞ(和紙の原材料となる植物)が栽培されました。

(3) さらに、これから130年以上経って、用水路は土手がくずれ、土砂がたまり、雑草がしげって使えなくなっていました。水が入らないために、新田は3haしか米を作ることができませんでした。9代の米山宗持(むねもち)さんはその水路が荒れているのを見て、前の美しい水田にしたいと考えました。滋賀県の信楽(しがらき)にあった代官所(だいかんしょ)に工事の願いを出ましたが、許可されませんでした(参考⑨)。そこで、江戸(今の東京)に行き、江戸幕府(ばくふ)の老中松平定信(ろうちゅう まつだいらさだのぶ)に申し出て、やっと許可をもらいました。

(4) 文政12年(1829年)に村人と共に工事を開始しました。横輪川より約7.6kmの水路を開く計画でした。横輪川の上流に井堰(いせき、堰ともいう、水を他へ引いたり流量を調整したりするため、水をせき止める所、写真③)を作り、横輪川の水を分けて流す工事でした。井堰は土や石を積んで作りました。横輪川に並行(へいこう)して、大熊山(おぐま(やま))と日向山(ひなたやま)のふもとに沿って、みぞを掘りました。水路の高さは、提灯(ちょうちん)のあかりで高さを決める提灯測量(参考⑩)で測りました。水路は台法寺山(だいほうじやま)をこえないとい、水が円座に流れません。それで、約150mのトンネル(隧道、すいどう)を掘りました。トンネルは現在の上野台団地の近くで、サニーロードの下を横切って、通っています(写真⑪⑫)。方向磁石(参考⑪)と水準器(参考⑫)を使って、トンネルの方向や傾きを決めて、石ノミと槌(つち)だけで岩をけずり、土を「もっこ」を使って外に運び出しました。あかりは「がんどう」(参考⑬)を使いました。掘った所は木を組んで支えを作りました。天保2年(1831年)に、7.6kmにおよぶ長い水路がほぼできあがりました。

(5) しかし、1831年の7月に大雨が降り洪水によって、せっかく作った水路は切れて、トンネルもくずれ、水路のほとんどは使えなくなりました。ここで、宗持さんはあきらめませんでした。米山家の財産をすべて投げ出し、かつ米山新田を担保(たんぽ、借金のかたに保証として差し出す物)にして、借金をしました。天保3年(1832年)にもう一度、工事を再開しました。トンネルには、愛知県の三河(みかわ)の丈夫な石(参考⑭、写真⑮)で支えをしました。現在は大水が出た時に、あふれた水を横輪川にもどす仕組み(「うてび」と呼ばれる、参考⑯)がいくつかの所にあり、水路には、「うてび」の標識(写真は第1うてび)があります。また、大雨の時、流量によって自動的に動く「転倒ゲート」(参考⑮、写真⑯⑰)も設置されています。



(6) こうして、米山用水はやっと完成し、新田の約 10ha と廃田(はいでん、使われなくなった田)になっていた田の約 27ha に灌漑(かんがい、水を引くこと)することができました。村人は用水を引いた水田で米作りに励みました。

(7) 宗持さんはこの工事に私財 1389 両(参考⑯)を投じただけでなく、円座村は新田を担保に 1000 両の大きな借金を背負い込みました。この後、不運にも、大凶作(だいきょうさく、農作物の生産が非常に悪いこと、天保の大飢饉(てんぽうのだいききん))(参考⑰)にあい、米の収穫が減って、借りたお金が返せなくなりました。返せないと、担保にした新田を取られてしまいます。宗持さんは借金の責任を取って、天保 10 年 1 月 23 日(1839 年)にみずから切腹(せつぶく)して命を絶ちました(参考⑱)。

(8) その後、明治 9 年(1876 年、11 代の宗寿(むねとし)さんの時)にやっと 1000 両の借金を返すことができました。

(9) 明治 18 年(1885 年)に、円座村をはじめ、三重県内および三重県外の有志の人々は米山宗隆さん、宗持さんの立派な仕事に感謝して、米山新田の真ん中に、円座郷(村)墾田碑(えんざむらこんでんひ)を建てました(写真⑲⑳)。その功績を今も世の中の人々に伝えています。沼木地区の先人(せんじん)の知恵や自己犠牲(ぎせい)をいとわない心に、今の私たちは学ぶところが多いです！

(10) 昭和 50 年(1975 年)に、サニーロード(南伊勢広域農道)の開通工事のさいに、サニーロードの下を横切っているトンネルが埋まってしまわないように、伊勢市役所がトンネルをコンクリートで修理しました(参考⑲)。

(11) 円座町の人々は米山用水を『堰溝(ゆみぞ)』、頭首工を『奥の堰(おくのゆ)』(参考⑳)と呼んでいます。現在、米山用水は 3 面がコンクリート製の溝に改修されています(改修時期は不明)。

(12) 每年、春の田植えの前になると、円座町の住民は「出合い」(であり、地域の協働(きょうどう)作業)で、用水路の掃除(そうじ)や、土手の草刈りをして、田に水を入れる準備をします。田植えが始まると、順番に用水路の見回りを行います。必要に応じて、水の流れを調節します。壊れたところあれば、修理します。6 月上旬ごろにはホタルが赤井山(あかいさん)側の用水路の周りを飛ぶのを楽しめます。

(13) 宗持さんが 1811 年に開いた曹洞宗(そうとうしゅう)の正覚寺(しょうかくじ)は米山家の菩提寺(ぼだいじ、先祖代々の墓がある寺)です。毎年、盆(8 月 15 日の夜)に境内(けいだい)で「かんこ踊り」(参考⑳)が行われます。『円座の羯鼓踊(かんこおどり)』は 1964 年に三重県の無形民俗文化財に指定されました。

【参考】

参考①: あわ: 中国から伝わった小粒(直径約 1.5mm)の穀物。明治の始めは米より栽培量が多かった。明治末期まで主食のひとつ。

参考②: 紀州藩: 江戸時代に紀伊国(きいのくに、今の和歌山県と三重県南部)と伊勢国(いせのくに)の南部(1619 年から紀州藩領)を支配した藩。藩主は紀州徳川家。伊勢国を治めるために、松阪城に城代(じょうだい、藩主の代わりに城を管理する家臣)をおいた。玉城町(たまきちょう)の田丸(たまる)に田丸代官所があった。

円座組: 組には、42 ケ村あり、1 万 2 千石あった。江戸時代の円座、上野、神蔵だけではなく、広い地域を含んでいた。横輪と下村(しもむら)・菖蒲(しょうぶ)・上村(かみむら)・床の木(いすのき)(現在の矢持町)は(江戸)幕府直轄領(俗称として、天領ともいう)に属して、四日市代官所、信楽(しがらき)代官所の支配下にあった。円座村は江戸時代には戸数 50 戸との記載がある。

大庄屋(おおじょうや): 江戸時代の最上位の村役人、身分は農民であるが、米山家は紀州藩の地主(じし)であった。

地主(じし)制度: 紀州藩は地域の有力者に対して、土着のまま、武士の身分として取り立てた。苗字帯刀(みょうじたいとう、姓を名乗り、太刀(たち)を腰に差す武士の特権)を許され、村々を統治した。

参考③: 米山宗隆: 1621 年～1702 年。元々、姓は越賀(こしか、出身の(志摩市の)越賀が由来)で、名は多一郎であった。断絶していた米山家を継いだ時に改名した。父の越賀隆春(たかはる)が丹波(たんば)の綾部(あやべ)から 1635 年に円座村に隠退(いんたい)した時に、従ってきた。米山用水を開発する前に、紀州藩から命ぜられて、多気町にある五桂池(ごかつらいけ)の灌漑用溜池(かんがいようためいけ、三重県で最大)を、大庄屋の三谷吉左衛門とともに、元締(もとじめ)として、造った(1679 年完成)。

参考④: 新田と新田開発: 日本では、戦国時代に、各大名が国の力を高めるために、米の増産、農地開拓に取り組んだ。戦国時代末期から江戸初期に人口が増加したが、食糧が不足し、主食の米が必要とされた。江戸幕府や各藩のすすめのもと、役人や豪農や商人が中心となって、湖などの埋め立て、台地や谷間の湿地帯などの内陸部の荒れ地でも新田の開拓が行われた。新田開発は大規模な工事で大量の用水を導いて、それまで水利のよくなかった台地や扇状地の中央まで行われた。米山新田はこの例の一つである。江戸時代初期に全国で 1800 万石(石高(こくだか)で土地の生産性を表した。1 石(こく)はおとな一人が 1 年間で食べる米の量に相当。成人男性で 1 日に玄米 5 合。米の 1 石 = 10 斗(と) = 100 升(しょう) = 1,000 合(ごう)。約 180.39L。)から後期には 3000 万石に、倍近く増えた。新田開発のためには、測量技術の進歩があった。新田開発は非常に大きな利益も期待できたが、開発の困難さから資金難のリスクもあって、投資した商人には破産する者もあった。また、新田は、古くからの農地より自然災害のリスクの高い土地が多くあった。本田(ほんでん): 江戸前期の総検地によって決定された田、畠、屋敷。新田: 江戸前期の総検地以降に開発

- された田、畑、屋敷。新田は本田に対する語。墾田(こんでん)：新開発地は古くは墾田といわれた。(例)奈良時代の墾田永年私財法(こんでんえいねんしざいほう)⇒墾田は永久に私有地とすることを認めた法(743年発布)。
- 参考⑤：米山宗隆が開発した約5.5km(資料1、2、3、5)(資料7では約4km)の水路は、現在「野田崎古溝(のださきこう)」(資料1)と呼ばれている。残念ながら、水路のルートは不明である。米山用水と米山新田の工事に数千両(後述の参考⑯)を使った。
- 参考⑥：大熊山：上野町の人は「おぐま(やま)」と呼んでいる。神岳(かみがだけ)のふもと付近にある小高い山。南から順に、おぐま、日向山(ひなたやま)、台法寺山(だいほうじやま)がある。今の上野台団地のある場所は台法寺と呼ばれていた。
- 参考⑦：もっこ：縄や竹・つるを編(あ)んで作った土砂の運搬道具。人がかつたり、せおったり、手で持て運んだ。昭和の初期まで、土木工事は、この「もっこ」で土をいっぱい入れて、棒でかついで、運んでいた。
- 参考⑧：1ヘクタール(ha)=100m×100m=10,000m²=約1町。よって、7ha=70,000m²。
- 参考⑨：代官所：今の滋賀県甲賀市の信楽(しがらき)に「信楽役所」と呼ばれた代官所があった。代官は近隣の灌漑を害する(中世から最も多い争い)と、許可を与えなかった。信楽代官所に行ったのは、頭首工のある横輪は江戸幕府領のためであったと考えられる。四日市にも代官所があったが、享和元年(きょうわがんねん、1801年)以降、信楽代官多羅尾(たらお)氏の支配を受けて、四日市には出張陣屋が置かれた。中世から農業用水をめぐる争いは日本各地で多発し、死活問題であった。
- 参考⑩：提灯測量：江戸時代から明治時代において、提灯を棒に立てて、夜間に目印として高低差を測量した。多くの人々が提灯を持って並び、提灯の高さを調節することにより測量した。
- 参考⑪：方向磁石：江戸時代後期に地理学者伊能忠敬(いのうただかか)は日本各地を測量して、精度の高い日本地図「大日本沿海輿地全図(えんかいよちぜんず)」を作成した。このとき、「小方儀(しょうほうぎ)」という方向磁石を使った。
- 参考⑫：水準器：江戸時代の水準測量は角材の1面に長いみぞを掘り、その中に水を注いで水平の基準面を定めた。この水準器は水盛り台(みずもりだい)と呼ばれた。一般に水準測量を「水盛り」と称した。
- 参考⑬：がんどう：江戸時代に発明された携帯用ランプの一種。正面のみを照らし、外観は桶(おけ)状で中央にロウソクを固定した。
- 参考⑭：三河の石(写真⑮)：愛知県の三河にある岡崎市は市内の山から切り出される良質な御影石(みかけいし)と技術力のある石工(いしく)職人で知られている。花崗岩(かこうがん)、マグマが深い所で固まった深成岩の一種)は石材になると、御影石と呼ばれる。
- 参考⑮：うてび(写真⑰～⑲)：漢字は打樋。樋(とい)は水を送り流すもの。資料1では「ゆせき」と記載されている。この用語が正しいかは調べたが、不明。
- 転倒ゲート(写真⑳⑳)：洪水時に流量が多いと、ステンレス製の油圧シリンダーが下に作動し、ゲートが倒れて水路の水を横輪川に戻す。(制作年月：昭和57年(1982年)3月、松阪市の宇野重工株式会社製)
- 参考⑯：1両の価値：単純に比べることはできない。同じ江戸時代でも、時期や場所によって、値段が異なる。また、何と比べるかでも大きく異なる。米の価格で比べると、1両は江戸初期で10万円、中期～後期で3～5万円、幕末で3～4千円という評価(山梨県立図書館の資料による)もある。あくまでも参考である。
- 参考⑰：天保の大飢饉(てんぽうのだいききん)：江戸時代後期の1833年(天保4年)から1839年まで続いた。江戸時代三大飢饉の一つ。洪水や冷害があり、大凶作になった。米価・物価が高騰し、非常に多くの餓死者と病人を出した。百姓一揆や大塩平八郎の乱(1837年)が起り、老中水野忠邦(ただぐに)の天保の改革(1841年～1843年)につながった。
- 参考⑱：米山宗持：寛政2年8月23日(1790年)(資料6)～天保10年正月23日(1839年)。没年は天保10年(正月)であることを米山公美(きみよし)さんとともに米山家の米山宗持の墓石で確認した。資料1、5及び「米山新田開発跡」の石碑(墾田碑の右側にある)の没年1842年は誤りである。資料6では没年が天保18年となっているが、これも誤りである(天保は15年まで)。生年の寛政2年も資料6以前の米山家の資料では記述がない。没年時で53歳(資料1)も確かにない(数え年で数えても一致しない)。資料7(後に記載)の没年の誤りは2023年8月に訂正された。
- 参考⑲：米山用水は、サニーロードの下を横切って、上野町の日向(ひなた)に入り、アジサイの植えてある所と並行している(写真⑮)。米山用水は上野町の日向を通っているので、円座町と上野町の取り決めで、日向の田んぼに水を分けるために、水路の側壁に穴が数か所開けてある。
- 参考⑳：堰溝(ゆみぞ)、奥の堰(おくのゆ)：円座町では、近年、「堰(ゆ)」ではなく、「湯」が慣用的に使われてきた。円座町の方から、「ゆ」に対して、「堰」と表記したほうが良いのではとの指摘を受けた。著名な民俗学者柳田國男の著書『故郷七十年』の中にも「堰溝(ゆみぞ)」という灌漑用水の掘鑿(くっさく)との記述がある。「堰溝(ゆみぞ)=灌漑用水」と考えられる。ご指摘ありがとうございます。
- 頭首工にある工事銘板(めいばん)(写真⑯)：これによると、頭首工は1959年に復旧工事(工事名：昭和33年度災害復旧事業、竣工(しゅんこう)：昭和34年8月15日、伊勢市円座町の森組が施工)が行われた。
- 参考㉑：かんこ踊り：伊勢市円座町に伝わる民族芸能で、正覚寺境内で盆(8月15日の夕刻6時半ごろ)に大きな火が焚かれ行われる。馬皮の鼓(づみ)を腰につるして肩から白い布で支えて、両手のバチで打ち鳴らして、念佛の音頭に合わせて踊る。踊り子は頭に『シャグマ』という被り物をつけ顔まで覆(おお)い、白紺(または白黒)の胴着、腰に『シモタ』と呼ぶ菅笠(すげみの)、足は脚絆(きやはん)を巻いて、地下足袋(じかたび)を履く。起源は慶安(1648～1652)の初期ごろといわれている。夏の風流の芸能である！

2

圓座郷(円座村)墾田碑(えんざむらこんでんひ)

円座村墾田碑(写真①)は明治 18 年(1885 年)に、当時の円座村をはじめ、上野村、津村、神蔵(かみその)村、佐ハ(そうち)村、横輪村、下村(しもむら)、菖蒲(しょうぶ)村、上村(かみむら)、床之木(いすのき)村、沼木地区外の三重県内、および三重県外の有志の人々によって、米山宗隆(むねたか)、宗持(むねもち)の功績に賛同して、米山新田の真ん中に建てられました。墾田碑は地域の人々の生活を豊かにするためにつくした二人の功績を今も世の中の人々に伝えています。碑の上部には元紀州藩主徳川茂承(もちつぐ)の篆額(てんがく)、石碑などの上部に篆書体(てんしょたい)で彫られた題字)が添えられています。碑の文章は明治の漢詩人、衆議院議員で松阪市射和(いざわ)出身の矢土勝之(やづちかつゆき、号は矢土錦山、きんざん)が作成しました。以下は、この文を中村澄夫さんが解説したものとし、簡略化し、かつ現代語におしたもの(参考①)。(米山新田は 1973 年に伊勢市史跡に指定され、墾田碑の前に解説案内板があります。)

円座村墾田碑(要約)

伊勢の国(いせのくに)度会郡(わたらいぐん)の円座村は、昔、紀州藩主(きしゅうはんしゅ)の治める地域であり、米山氏はこの土地の人々から信頼されている家の出身です。4 代の宗隆(むねたか)さんは、この地域の荒れ地を嘆(なげ)いて、荒れ地を開墾(かいこん)する決心をし、これに専念しました。この村の人々も喜んで、この仕事に参加しました。遠くから谷川の水を引き、50 町(1 町=約 109m なので、約 5.5 km)の長さの水路を作りました。これによって、水田を 5 町(約 5ha)と畑を 2 町(約 2ha)得ました。元禄 4 年(1691 年)に、紀州藩は米山宗隆をほめたたえ、ほうびを与えました。

それから 140 年後、用水路は水路として役に立たず、田には雑草がはえる状態でした。9 代の米山宗持(むねもち)さんは、祖先のした事業が荒れ果てているのを見て、再興(さいこう)しようと働きました。石でできたトンネルを作りましたが、これは長さが 60 間(けん)(1 間=1.82m なので、約 109m、参考②)でした。灌漑(かんがい)用水路をなおして整備することによって、新田が 14 町(約 14ha)得られ、以前の田も含め、昔のように美しい田となりました。これは横輪川をじようずに利用した水利事業でした。天保 2 年(1831 年)7 月に、紀州藩主はすばらしい業績にたいして、米山宗持にほうびとして二人扶持(ふたりぶち、参考③)を授(さず)けました。

この文は米山宗寿(むねとし)さん親子の求めに応じて、矢土勝之(やづちかつゆき)が書きました。

参考①:碑文において、内容が不明なところは省いた。大幅に簡略したところもある(米山家所蔵の墾田碑の拓本は写真②)。

書は明治の著名な書家である巖谷 修(いわやしゅう)による。号は一六(いちろく)。明治の三筆の一人と云われている。

参考②:他の資料(1、5)では、約 150m となっていて、一致していない。碑文は残念ながら、現在、こけと汚れのため、ほとんど判読できないが、拓本で確認すると 60 間となっている。

参考③:二人の大人が 1 年間に食べる量の米が与えられた。

3

弁天(べんてん)さん

米山宗隆(むねたか)は水路(約 5.5 km)で、現在「野田崎古溝」(のださきこう)と呼ばれています)を工事の際、水路の安全を祈願(きがん)するために、滋賀県の琵琶湖(びわこ)の北部に浮かぶ竹生島(ちくぶしま)にある宝厳寺(ほうごんじ、参考①)・都久夫須麻神社(つくぶすまじんじや)で祀(まつ)られている弁才天(べんざいてん、参考②)を勧請(かんじょう、参考③)しました。米山新田の円座村墾田碑のすぐ後ろに祀られている(写真②)。円座町の人々は親愛を込めて、弁天さんと呼んでいます。

参考①:竹生島神社(ちくぶしまじんじや)とも呼ばれる。

参考②:日本三大弁才天(竹生島、宮島、江ノ島)の一つ。弁才天は水に関係する神様で、七福神のひとり。元はヒンドゥー教の女神で、河の神であった。河辺に居住すると云われていたので、水辺に祀られてきた。像は琵琶(びわ)、水瓶(みずがめ、すいびょう)などを持ち、音楽・芸術・財運などの女神として信仰されている。弁財天とも書かれる。

参考③:離れた土地から分霊を迎えて祀ること。

『沼木学びウォーク：米山用水（堰溝）のルートをたどる』

沼木まちづくり協議会・沼木こども自立塾委員会とイベント委員会の共同企画

2022年12月11日(日)8:30~12:00 実施

米山用水（堰溝、ゆみぞ）は、三重県伊勢市横輪町の横輪川の米山用水頭首工（とうしゅこう、河川から用水の取り入れ口、おせん淵の少し下流）から上野町を通って、円座町まで続いています。全長約7.6kmあります。全ルートを歩くと、大人でも3時間以上かかります。また、危険と思われる所もいくつかあります。そのために、当日は歩いて見る所と車で移動する部分を組み合わせて、米山用水のルートをたどりました（後に掲載の写真参照）。

8:30:①沼中グラウンド集合⇒みどり保育園バス＆レンタカーで横輪川の ①米山用水頭首工へ
⇒9:00ごろ：ウォークスタート⇒転倒ゲートまで歩く⇒②少し戻って宮川パークランド付近の倉ヶ谷橋（くらがたにはし）を渡る⇒車⇒③日向（ひなた）からウォーク再開⇒④上野小学校近くを通る⇒⑤米山新田⇒⑥円座邨墾田碑まで歩く。米山用水についての米山公美（きみよし）さんの説明⇒⑦車で沼中グラウンド（12:00解散）



4 写真

米山用水は近年になってコンクリートなどで改修・整備され、今日まで管理・利用されています。そのため、米山用水は江戸時代当時の姿のままではありません。しかし、米山用水のルートを実際に歩いてみると、機械を全く使わずに、山野の平らでない荒れ地に約 7.6 km の水路を切り拓く当時の工事がいかに困難であったかを体感できます。



①サニーロードから橋を渡り頭首工へ



②横輪川の米山用水頭首工(右奥が取入れ口)



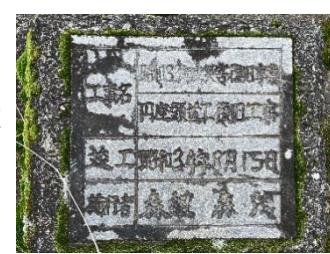
③横輪川の井堰
(いせき)



④米山用水の取入れ口
(左側が横輪川)



⑤米山用水の取入れ口



⑥頭首工にある工事銘板
(参考⑯を参照)



⑦第1うてび(全体)
左が横輪川



⑧うてび(上側が用水路)
水量が多いときは下側の水路で横輪川に戻す



⑨うてび細部(上側が用水路)



⑩うてび(水量が多いとき
右側の水路で川に戻す)



⑪前方に大きい岩。
土砂と落ち葉の
流入を防ぐために
鉄板が敷いてある



⑫転倒ゲート



⑬洪水時に転倒ゲートのステンレス製の
シリンダーが下に作動しゲートが倒れる
(前方中央にゲートのシリンダーがある)



⑭倉ヶ谷橋(くらがたにはし)



⑮上野町の日向を通る米山用水と
アジサイ(2023年6月7日)



⑯台法寺山を貫く約 150m のトンネル
(隧道、ずいどう)の入口(前方奥)



⑯約 150m のトンネルの出口
(上野台からサニーロード
沿いの反対側)



⑰トンネルに使用された三河産の
花崗岩の石材の一部(長さ約 1m)



⑱米山用水(上野台付近)



⑲円座町・米山新田の用水
入口付近(2023 年 6 月 7 日)



⑳円座村墾田碑と弁天さん
(弁天さんは写真の左側)



㉑円座村墾田碑の拓本
(米山氏所蔵)
上部には元紀州藩主
徳川茂承(もちつぐ)の
篆額(てんがく)が添え
られている



㉒米山さんの説明を聴く
(米山新田の解説案内板の前)



㉓円座町・米山新田
(2023 年 6 月 7 日)

5 参考資料

- 1) 西野儀一郎「ふるさとの人物風土記、度会の巻」、「三重交通株式会社社内報」、p. 66-71、1982 年 5 月、211 号(三重交通株式会社)。米山氏と米山新田について詳しい解説があります。この資料の出典については不明でしたが、三重県立図書館に調査相談を行った結果、三重交通(株)の社内報の可能性があるとの指摘を受けました。三重交通(株)に尋ねた所、出典の確認が取れました。三重県立図書館の職員の方々および三重交通(株)の職員の方、ありがとうございました。
- 2) 社会科副読本資料作成研究会編「5 地域のはってんにつくした人々」、「3・4 年社会科 わたしたちの伊勢市」、p.106-113、2021 年版、(伊勢市教育委員会)。写真とイラストで平易な説明があり、15 代の米山公美(きみよし)さんのインタビューも掲載されています。
- 3) 伊勢市教育委員会「米山新田」、「歴史教材 ふるさと伊勢」、p.12、2020 年、小学 6 年～中学 3 年向け。
- 4) 岩田貞雄「ふるさと再発見 嘉隆の志摩制覇」、2001 年 10 月 20 日、(中日新聞、伊勢志摩版)。
- 5) 浜口主一「ふるさと再発見 米山新田の墾田碑」、2010 年 9 月 11 日、(中日新聞、伊勢志摩版)。
- 6) 三重県編「米山宗持」、「先賢遺芳(せんけんいほう)」、p.131-132、1915 年、(三重県)。国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能です。
- 7) 伊勢市教育委員会 解説案内板『米山新田』、2012 年設置。円座村墾田碑の前にあります。

この解説は主に西野儀一郎著の資料 1 をもとに作成しました。西野儀一郎さんに深く感謝いたします。また、資料の提供、原稿の校正などをしていただいた円座町の方々および沼木まちづくり協議会のスタッフの皆さん、ありがとうございました。

作成責任者:沼木まちづくり協議会 立花和也
初版 2023 年 2 月 25 日 第 2 版 2023 年 6 月 16 日 第 3 版 2023 年 9 月 9 日

沼木まちづくり協議会

住所: 〒516-1104 三重県伊勢市上野町 823 (『沼中』、旧沼木中学校)

TEL: 0596-39-7240 FAX: 0596-39-7241

メールアドレス: info@numakijin.com ホームページ: <https://numakijin.com/>